

# オーダリング・パラドックスについて

## On the Ordering Paradox

荒木 一雄

### 1 オーダリング・パラドックス

Siegel (1974) に端を発し, Aronoff (1976), Allen (1978), Pesetsky (1979), Lieber (1980), Strauss (1982), Mohanan (1982), Kiparsky (1982a, b; 1983a, b), Pulleyblank (1983) 等によって前進させられた今日一般に受けいられている語彙音韻論 (lexical phonology) では, 接辞 (affix) には, クラス I とクラス II の 2 種があり, 接辞付加 (affixation) は, クラス I 接辞付加→クラス II 接辞付加の順で行なわれ, 強勢付与規則と, 接辞付加の出力に適用してその形式を適切なものにする調整規則 (adjustment rule) とは, クラス I 接辞付加とクラス II 接辞付加の中間で適用される。これら両規則がクラス II 接辞付加の前に適用されるのは,

a. クラス I 接辞は, 派生語の強勢の位置決定に関与し, 付加されると, 付加される語 (を基体 (base) と呼ぶ) の第 1 強勢の移動を引き起こすことがあるが, クラス II 接辞は引き起こさない,

b. クラス I 接辞は接辞自身の形または基体の形を変えることがあるが, クラス II 接辞は自身にも基体の形にも何の変化も引き起こさない,

という特性をもっているためである。クラス II 接辞付加はクラス I 接辞付加の後で行なわれる語彙音韻論では, したがって, 理論上は, クラス II 接辞は, 常に, クラス I 接辞の外側に生じ, その内側に生じることはないことになる。しかし, 英語の派生語の中には, この理論的帰結に対する例外, いうところのオーダリング・パラドックス (ordering paradox) の例が見出される。オーダリング・パラドックスには, 理論上は, 次の 4 型が考えられる (Kiparsky, 1983a, p. 17 参照)。

(i) 基体 + 接尾辞<sub>II</sub> + 接尾辞<sub>I</sub>

(ii) 接頭辞<sub>I</sub> + 基体 + 接尾辞<sub>II</sub>

(iii) 接頭辞<sub>I</sub> + 接頭辞<sub>II</sub> + 基体

(iv)接頭辞<sub>II</sub>+基体+接尾辞<sub>I</sub>

この4型のうち、(iii)型の例外は英語には存在しないが、(i)、(ii)、(iv)には下記のような例外が存在する。

- (i)a. developmental, governmental
- b. analyzability, cultivatability, extendability, etc.
- (ii) inconceivable, indescribable<sup>1)</sup>
- (iv)a. bilaterality, decongestant, extrametricality, extraterritoriality, hydroelectricity, reburial, renegotiable, polysyllabicity, pre-fabrication, underestimation, ungrammaticality, untruth
- b. unaccountability, unadvisability, etc.

## 2 従前の説明とその難点

しかし、上記の諸例は実際には例外でないとする説明が、(ii)型の2語についてはまだ、何人によっても提出されていないけれども、(i)型のものについては Selkirk (1982), 大石(1984; 1988) によって<sup>2)</sup>、(iv)型のものについては Siegel (1974), Allen (1978), Williams (1981), Selkerk (1982), Strauss (1982), Kiparsky (1983a), Fabb (1984), 大石 (1984; 1988), Pesetsky (1985), Suzuki (1987), Ohta (1987) によって、その内容は人によって異なっても、それらを例外としないという点では一致している説明が提出されている<sup>3)</sup>。問題は、従前の説明にはいずれにも、難点が存在することである。

### a. (i)型について

#### 1) Selkirk (1982)

-ment にはクラス I に属するものとクラス II に属するものの2種がある。動詞に付加されるものはクラス II であるけれども、ornament のように拘束語根 (bound root) に付加されるものはクラス I である。これは、Aronoff (1976, p. 54) の指摘するように、ornament, etc. にはクラス I 接尾辞である -al が自由に付加されるのに対して、動詞から派生した -ment 派生語には、原則として、-al は付加できないことによって証明される。

ornament	*orna <sub>v</sub>	ornamental
excrement	*excre <sub>v</sub>	excremental
regiment	*regi <sub>v</sub>	regimental
fragment	*frag <sub>v</sub>	fragmental
discernment	discern	*discernmental
containment	contain	*containmental

derangement                      derange                      \*derangemental

-able にもクラス I に属するものとクラス II に属するものの 2 種がある (Aronoff, 1976, pp. 122ff.; 大石, 1985, pp. 460f. 参照)。Selkirk (1982, p. 104) は (ia, b) は -ment<sub>I</sub>, -able<sub>I</sub> のいわば類推によって, -ment<sub>II</sub>, -able<sub>II</sub> が -ment<sub>I</sub>, -able<sub>I</sub> に再分析 (reanalyze) されたものであるとしている。

しかし Selkirk の説明には, 次の難点が指摘できる。もし類推によって再分析されたのであったならば, 類推はすべての -ment<sub>II</sub>, -able<sub>II</sub> の派生語に働いてよい筈である。しかし再分析が行なわれているのは, -ment<sub>II</sub> については上掲の 2 語だけであり, -able<sub>II</sub> の方は, -ment<sub>II</sub> より多いけれども, 後でみるように, -able<sub>II</sub> の派生語の一部分についてだけであることには変りはない。類推が働かなかった語では何故働かなかったのかという疑問が当然起こるが, Selkirk にはその答えが用意されていないし, 用意できそうにないことである。

## 2) 大石 (1984; 1988)

a) 大石 (1984) も Selkirk (1984) と同じようにクラス II 接尾辞がクラス I 接尾辞に再分析されたものとする。しかし再分析は類推によるものではなく, 「再分析が行なわれる語というのは, 頻度等の要因により, 言わば, 手あかにまみれて合成的な派生語から非派生語に近い資格を有する語へと変質しているものである」 (p. 90) とする点が Selkirk とは異なる。Halle (1973a, p. 16), Aronoff (1976, p. 22) も述べているように, 文と違って派生語は, 話者が話す度毎に, 話者の辞書 (lexicon) が収録している基体, 接辞を材料にして, 語形成規則, 調整規則, 音韻規則を用いて, いちいち作り出すのではなく, 最初に派生語を作る必要が生じた時に, 1 度だけ, 上述の諸規則が適用され, その出力が辞書にたくわえられて, 次にその語を必要とする時に, 辞書から取り出して使われると考えるのが至当であろう。したがって, 再分析と頻度と結びつけて考えたのは, 慧眼とってよい。また大石 (*ibid. fn.*) が言及している「クラス II 接辞付加による派生語よりも, クラス I 接辞付加による派生語の方が非合成的で, 非派生語に近い」という Allen (1978) の主張も妥当なものであろう。しかし, 大石の説明にも, 使用頻度が高いと, クラス II 接辞がクラス I 接辞に再分析されるという論理は今一つ説得力に欠ける, という難点が存在する。

b) 大石 (1988) は混成 (blend) という周辺の語形成規則によって作られたものとしている。説明の詳細とその難点については 2, b, 1) 参照。

## b. (iv)型について

上に列挙した (iv) 型についての従前の説明のうち, Siegel (1974) については Allen (1978, p. 43), Sproat (1985, § 1.1.2), Suzuki (1987, pp. 81f.) に, Allen (1978) について

は Sproat (1985, § 1.1.4), Suzuki (1987, p. 82) に, Williams (1981) については Kiparsky (1983a, p. 20), 大石 (1988, pp. 199f.) に, Selkirk (1982) については Kiparsky (1983a, pp. 19f.), Suzuki (1987, p. 82), 大石 (1988, p. 200) に, Strauss (1982) については Kiparsky (1983a, p. 20), Sproat (1985, § 1.1.7), Suzuki (1987, pp. 86f.), Ohta (1987, p. 48fn.), 大石 (1988, p. 200) に, Kiparsky (1983) については Sproat (1985, § 1.1.9), Suzuki (1987, p. 87) に, Fabb (1984) については Sproat (1985, § 1.1.4), Suzuki (1987, p. 82) に, Pesetsky (1985) については Sproat (1985b, §§ 1.1.5, 1.1.10), Suzuki (1987, pp. 83-85), 大石 (1988, pp. 158ff.) に, その説明の内容の紹介と, その難点の適切な指摘とが行なわれているので, ここで今一度それを取り上げることはしない。残る大石 (1984; 1988), Suzuki (1987), Ohta (1987) の説明の内容とその難点と筆者には思われることを以下に述べる。

#### 1) 大石 (1988)

大石 (1988, pp. 203f.) の説明は, 部分的には, Kiparsky (1983) と軌を同じくするもので, (iv)型のもは, 「正規の語形成規則の体系とは別個の周辺的な語形成規則」である「辞書にある語どうしを, クラス間の関係にかかわらず, 混成で結びつけてゆく規則」の適用によって生れたものとしている。即ち, 例えば ungrammaticality は ungrammatical と grammaticality とが混成したものであるとしている。しかし, 接頭辞<sub>0</sub>+X と X+接尾辞<sub>1</sub>の構造の語が辞書にあれば, 常に混成が可能なのではなく, 混成の基になる両方の語がよく知られているものであること, 及び混成によって生れた語にも, 接辞の範疇選択は守られていなくてはならないといういわゆる投射の原理 (projection principle) の2つを, 混成の適用を可能にする条件として提出している。この条件により, \*denatural のような混成語の形成が阻止される。<sup>4)</sup> 2, a, 2), b) で既に触れておいたように, 大石は(iv)型についての上記の説明は(i)型にも適用できるとしている。

大石の説明は非常に筋が立っているものであることは十分に認められる。しかし大石の説明にも次の2つの難点が指摘される。その1つは, 混成という語形成規則は, 大石自身もいっているように周辺的なものであり, 過去の歴史は, 明らかに混成によって作られた語というものの多くは臨時的なものであり, (i), (iv)を除くと, 辞書に定着しているものの数は非常に少ないことを示している。しかし, 後でみるように, (i)型のうちの X-ability 語と(iv)型のうちの un+X+ability 語は, 混成によって作られた語とみるのには, その数が多すぎることである。難点の第2は, 2, a, 1) Selkirk (1982) の難点として指摘したのと同種のもので, 大石自身も認めているように, 大石のあげている上記の2つの条件は, 混成の必要条件ではあっても十分条件ではない。条件をみたしていながら混成が起っていない語が数多くある, というより, 後でみるように, 起こっていない語の方が遥かに多い。混成の十分条件が大石には用意されていないし, 用意できそうにないことである。

2) Suzuki (1987)

Suzuki (1987, pp. 88ff.) の説明は(iv)の諸例のうち<sup>5)</sup>の un-X-ability 語についてだけであるが、-able につく -ity はクラス II であるとする。クラス II であればオーダリング・パラドックスにはならないことになる。そして -able につく -ity をクラス II とする理由として -able につく -ity の生産性の高さをあげている。一般論として、クラス II 接辞はクラス I 接辞より生産性が高い (Allen, 1978, pp. 23-26)。したがって、-able につく -ity は生産性が高いことは、-able につく -ity をクラス II と考える 1 つの根拠になり得る。しかし -able につく -ity をクラス II とみなすことには、次の 3 つの点が問題とされるであろうことを予想して、その答えも Suzuki は用意している。Suzuki の予想する問題というのは、i) クラス II 接尾辞は、当初に述べたように、強勢付与規則が適用された後に付加され、したがって基体の第 1 強勢の移動を引き起こさない筈であるのに、un-X-ability 語では第 1 強勢の移動が生じている。更に、クラス II 接尾辞は基体の形には変化を引き起こさない筈であるのに、-ity は基体の -able を -abil に変える。ii) 同一の接辞をクラス I とクラス II の両方に属させることには問題はないか。iii) 付加される基体の形に条件をつける接尾辞の例は他にもあるか。i) に対して Suzuki が用意している答えは、クラス II の -ity 付加の規則には、基体 X-able の /b/ と /l/ の間に /i/ を挿入し、第 1 強勢の位置を派生語の末尾から 3 番目の音節に移動させるということが規定されているというものである。クラス II に属しながら基体の第 1 強勢の位置を移動させるものは他にもある。また ii), iii) に対しては、そのような接辞は他にもあるという答えが用意されている。

Suzuki の説明は、上記のように、よく考えられ、周到に用意されたものであるが、Suzuki の説明にも、次の 2 つのことをその難点として指摘できる。難点の第 1 は、-ity<sub>II</sub> を付加する規則にだけ上述のような規定が含まれているとするのは、如何にも ad hoc という印象をぬぐい切れない。-ity の他に、クラス II の接尾辞でありながら、基体の第 1 強勢の移動を引き起こす例として Suzuki のあげているのは Siegel (1974, p.178) のあげている -teria である。Siegel によると、-teria には -teria, -eteria の 2 種類の異形態があり、-eteria は語末に強勢をもつ基体に付加され、語末に強勢をもたない語には -teria が付加される。即ちどちらの異形態を選ぶかは基体に含まれる強勢情報に依存している。それゆえ -teria はクラス II ということになる。しかし -teria はクラス II でありながら、付加されると基体の第 1 強勢の位置を、

cāk-etéria grōcer-téria

のように移動させる。その限りでは、確かに -teria は、一見、-ity<sub>II</sub> の類例になる。しかし -teria<sub>II</sub> は基体の第 1 強勢の位置を移動させる点では -ity に似ているけれども、-ity<sub>II</sub> のように基体に存在しなかった音を挿入することはない点で、-ity とは一線を画する。更に、

上述の理由で, Siegel は -(e)teria をクラス II の接尾辞として扱ってはいる。しかし -eteria が付加される語末に強勢をもつ語というのはすべて 1 音節の語であり, -teria が付加される語末に強勢をもたない語というのは, これはいうまでもなく, 2 音節以上の語である (Siegel, 1974, p. 177 参照)。-(e)teria は Siegel のように基体の第一強勢の位置を移動させるクラス II 接尾辞として扱うより, -eteria はクラス I 接尾辞であり, 2 音節以上の語に付加された時には, t の前の -e が落ちるといふ調整規則が働き, 強勢付与規則によって, 第 2 サイクルで基体の第 1 強勢が -téria に移動すると考えた方がより妥当であると思われる。その場合には, いかなる意味においても, -teria は -ity<sub>II</sub> の類例にはならない。第 2 の難点は, ある特定の語尾を好む傾向をもつ接尾辞は確かに存在するけれども, -able につく -ity だけクラス II とすることは, -ity<sub>II</sub> は -able にしか付かないということになるが, ある特定の語尾にしか付かないという接尾辞は他には存在しないことである。以上の 2 つの難点に加えて, 次のことも指摘しておく必要がある。Suzuki は -able につく -ity の生産性の高いことを -able に付く -ity をクラス II と考える理由にあげている。Suzuki の指摘するように, Lehnert (1971) にあげられている 1641 個の -ity 名詞のうち 33% に当る 545 個は X-ability (または X-ibility) という形のものであるのは事実である。しかしその一方において, 1641 個の -ity 名詞のうち 67% は -ity<sub>I</sub> 名詞であるという事実も見落してはならない。つまり生産性は -ity<sub>I</sub> の方が -ity<sub>II</sub> よりずっと高い。Suzuki の問題にしているのは特定の語尾に付加される -ity の生産性であるとしても, 大石 (1985, p. 452) によると, 生産的に -ity が付加されるのは X-able だけでなく, X-ic, X-al, X-id にも -ity は生産的に付加される。いいたいことは, X-ability (または X-ibility) 形式の名詞の数の大きさは, -able につく -ity をクラス II と見る強力な根拠にはならないということである。

### 3) Ohta (1987)

Ohta (1987) は, Williams (1981, p. 248) の,

#### 1. 右主要部の規則 (Righthand Head Rule)

形態論では, われわれは形態論的複語の主要部は当該語の右側の成員であると定義する (In morphology, we define the head of a morphologically complex word to be the righthand member of that word)

を踏え, Lieber (1980, pp. 85-6, 88, 93) の提案している素性浸透の規約 (Feature Percolation Conventions) を修正した

#### 2. 主要部の素性浸透の規約 (Head Feature Percolation Convention)

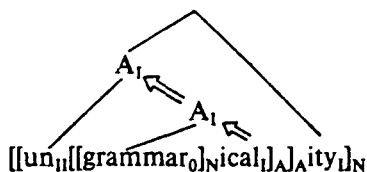
主要部の範疇と類の素性を含むすべての素性は主要部を支配する枝分かれ節点に浸透する (All features of a head, including category and class features, percolate up to the branching node dominating it)

を採用すると同時に、素性に $[\pm N]$ ,  $[\pm V]$ ,  $[\pm \text{plural}]$ ,  $[\pm \text{latinate}]$ ,  $[\pm \text{present}]$ ,  $[\alpha \text{ person}]$ 等の外に、接辞のクラス I, IIを加え、更に、

3. 一般順序付けの仮説 (Generalized Ordering Hypothesis)

接辞付加においては、基体のクラス数は接辞のクラス数と同じかそれより小さくなくてはならない (In affixation, the class number of the base must be equal to or smaller than that of the affix)

をたてて、オーダリング・パラドックスの例とされているものをパラドックスの例でなくしている。このことを ungrammaticality について具体的に説明すると、先ず grammar<sup>6)</sup>に  $-\text{ical}_I$  が付加される。 $-\text{ical}$  の派生語 grammatical では  $-\text{ical}$  が主要部であるから、 $-\text{ical}$  のクラス素性 I は grammatical を支配する枝分かれ規則 A に浸透する。次に grammatical に  $\text{un-}_{II}$  が付加されて ungrammatical ができるが、 $\text{un-}_{II}$  が付加されても ungrammatical を支配する A という枝分かれ節点には、主要部の grammatical を支配する枝分かれ節点 A の I というクラス素性が浸透するので、ungrammatical 全体のクラス素性は I である。それゆえ  $-\text{ity}_I$  の付加が、接辞付加の順序付け仮説にもとることなく、可能になる。以上を図示すると下記のようなになる。



Ohta の説明は、生成形態論研究の最新の成果をとり入れ、それに論者の創意を加えた斬新なものとして評価に値する。また Ohta の説明は、単に (iv) 型の例だけでなく、 $[\text{atomic scientist}]_{\text{ist}}$ ,  $\text{un-}[\text{self-sufficient}]$  のように複合語にクラス I, II の接辞が付加されている例も含む、すべてのオーダリング・パラドックスの例に適用できるものとして提案されている。その点も十分な評価に値するものである。しかし、Ohta の説明にも 1 つの致命的な難点が存在している。それは、Ohta の説明では (i) 型のものと (ii) 型のものとは説明できないことである。

3 代 案

筆者の代案は、2, a, 2) 大石 (1984) のところで述べたことをここに今 1 度繰り返して述べることから始める必要がある。それは、派生語は話者が話す度毎に、いちいち作り出すのではなく、最初に派生語を作る必要が生じたときに、1 度だけ、諸規則を用いて作り、それを辞書にたくわえておいて、その語を必要とする時に辞書からとり出して使われると

考えるのが至当であるということである。更に、語彙音韻論では、接辞はクラス I, クラス II に属することを示す +, # の境界記号ははじめから含んで居らず、派生語の内部構造を示す [ ] も、規則の適用が終るとすべて消去される。したがって、派生語も非派生語も、辞書では外形的には区別がつかない。このことも手伝って、多用される派生語は語根化し、内部構造的にはオーダーリング・パラドックスになるような派生語の形式を可能にする。ungrammaticality についていうと、辞書にたくわえられている ungrammatical が語根化して居り、話者が ungrammaticality という派生語を作るときには、話者の頭の中では

[[ungrammatical]ity]

という形成過程になっているというのが筆者の代案である。より正確にいうと、ungrammatical が内蔵している辞書の中で語根化した単数または複数の話者によって ungrammaticality という派生語が作り出され、それが母国語話者の間で普及して行ったもの、というのが筆者の代案である。

多用されているうちに語根化するということは、それを裏返せば、同じ構造の派生語でも、語根化していなければオーダーリング・パラドックスになるような接辞不可を許すのは、限られた一部の語であるのが常態ということになる。事実もこれを裏付けている。(i)型の中では一番その例の多い X-ability 形のもの、(iv)型の中でもやはり一番その例の多い un-X-ability 形のものについて、『研究社新英和大辞典』で X-able<sub>II</sub> 語と X-ability 語、un-X-able 語と un-X-ability 語の比率を求めてみると、

(i)型。a, b, c ではじまる -able<sub>II</sub> 語は 139 語収録されているのに対して、-ability 語はその 28% の 39 語にしかあげられていない。

(iv)型。un-X-able は 236 語収録されているのに対して、un-X-ability 語はその 10% の 24 語にしかあげられていない。

筆者の代案に対しては、語根化したと考えると、強勢型に不都合が生じるのではないかという問題提起が予想される。強勢付与ではクラス I 接辞付加された派生語は語根と同じに扱われるから、語根化したと考えるのも、クラス II からクラス I に再分析されたと考えるのも、強勢付与に際しては同じであるが、クラス II からクラス I に再分析されると、(i)型の governmental, developmental の場合は、強勢規則によって付与される強勢型が実際の強勢型と違ったものになるという不都合が生じることに既に Selkirk (1982, p. 105) が気付いている。しかしこの強勢型の難点は、再分析が生じて、-al<sub>I</sub> が付加される基体は再分析が行なわれる前のものとの強勢型を保持していると考えれば克服できることを、強勢付与規則を用いて具体的に証明してはいないけれども、示唆している。

強勢付与は、今日では、Liberman and Prince (1977) によって提唱され、Hayes (1980; 1982) によって修正された非線状的 (non-linear) な韻律理論 (metrical theory) によって行なわれるのが先端を行く音韻論研究者の間では普通であるが、ここではより多くの人に



なじみの深い、*SPE* 方式の強勢付与規則を Halle (1973) が修正し、それに更に Siegel (1974) が部分的に修正を加えたものによって、上記のことを立証してみよう。どちらによっても結果は同じであるから。

Halle (1973) が提出しそれに Siegel (1974) が部分的に修正を加えた強勢付与規則というのは下記のようなものである。語に [1 stress] を付与する規則には次の4種があり、それらは下にあげる順に語の内部の各サイクル毎に適用される。

主強勢規則 (Primary Stress Rule) [PSR]

$$V \rightarrow [1 \text{ stress}] -C_0 (W) \left[ \begin{array}{c} -\text{long} \\ +\text{syll} \end{array} \right] C_0 \# ]$$

強勢音節規則 (Stressed Syllable Rule) [SSR]

$$V \rightarrow [1 \text{ stress}] / -C_0 (W) (VC_0) [1 \text{ stress}] Q ]_{\text{NAV}}$$

語頭強勢規則 (Initial Stress Rule) [ISR]

$$V \rightarrow [1 \text{ stress}] / [\# C -$$

強勢除去規則 (Destressing Rule) [DR]

$$V \rightarrow [-\text{stress}] / [\# C_0 \left[ \begin{array}{c} \text{---} \\ -\text{long} \end{array} \right] C [1 \text{ stress}]$$

それに最後のサイクル、即ち、語のレベルで適用されて、強勢の降下 (stress subordination) を行なう次の2つの規則が更に付加わる。

複合語強勢規則 (Compound Stress Rule) [CSR]

$$[1 \text{ stress}] \rightarrow [1 \text{ stress}] / -Q ((\# \# P) VC_0 (+y)) ]_{\text{NAV}}$$

条件：Qは [1 stress] を含まない

Pは##を含まない

核強勢規則 (Nuclear Stress Rule) [NSR]

$$[1 \text{ stress}] \rightarrow [1 \text{ stress}] / ([1 \text{ stress}] R \# \# P) -Q ]$$

本節3の冒頭で述べたように、語彙音韻論では接辞も語も境界記号ははじめから含んでいないが、*SPE* の延長線上に位置する Halle (1973), Siegel (1974) の強勢付与規則は、接辞はその片側に+, #の境界記号を、語はその両側に#の境界記号をもつという前提で定式化されているので、以下の説明でも、煩雑さを避けるために、例語には境界記号を示していないけれども、語はその両側に#の、クラスI接辞はその片側に+の、クラスII接辞はその片側に#の境界もつものとして、規則の適用は行なわれていることも、予めことわっておくのがよいであろう。

Halle (1973), Siegel (1974) の強勢付与規則によって、developmental と governmental に強勢を付与すると、

1. もとの強勢を保持していない場合、

a. <sup>3</sup>developmental<sup>1</sup>

第1サイクル development

オーダリング・パラドックスについて

PSR            development<sup>1</sup>  
 SSR            development<sup>1 1</sup>  
 ISR            development<sup>1 1</sup> (空虚な適用)  
 DSR            適用できない

第2サイクル development<sup>1 1</sup>  
 PSR            development<sup>1 1 1</sup>  
 SSR            development<sup>1 1 1</sup> (適度な適用)  
 ISR            適用できない  
 DR            適用できない  
 CSR            development<sup>2 2 1</sup>  
 NSR            development<sup>3 3 1</sup>

developmental<sup>3 3 1</sup>

b. governmental<sup>3 1</sup>

第1サイクル govenment<sup>1</sup>  
 PSR            government<sup>1</sup>  
 SSR            government<sup>1 1</sup>  
 ISR            government<sup>1 1</sup> (空虚な適用)  
 DR            govenment<sup>1</sup>

第2サイクル governmental<sup>1</sup>  
 PSR            governmental<sup>1 1</sup>  
 SSR            governmental<sup>1 1 1</sup>  
 ISR            governmental<sup>1 1 1</sup> (空虚な適用)  
 DR            governmental<sup>1 1</sup>  
 CSR            governmental<sup>2 1</sup>  
 NSR            governmental<sup>3 1</sup>

governmental<sup>3 1</sup>

2. もとの強勢を保持している場合

a. developmental<sup>3 1</sup>

第2サイクル	<sup>1</sup> developmental
PSR	<sup>1</sup> <sup>1</sup> developmental
SSR	<sup>1</sup> <sup>1</sup> developmental (空虚な適用)
ISR	<sup>1</sup> <sup>1</sup> <sup>1</sup> developmental
DR	<sup>1</sup> <sup>1</sup> developmental
CSR	<sup>2</sup> <sup>1</sup> developmental
NSR	<sup>3</sup> <sup>1</sup> developmental

<sup>3</sup><sup>1</sup>developmental

	b. <sup>3</sup> <sup>1</sup> governmental
第2サイクル	<sup>1</sup> governmental
PSR	<sup>1</sup> <sup>1</sup> governmental
SSR	<sup>1</sup> <sup>1</sup> governmental (空虚な適用)
ISR	<sup>1</sup> <sup>1</sup> governmental (空虚な適用)
DR	適用できない
CSR	<sup>2</sup> <sup>1</sup> governmental
NSR	<sup>3</sup> <sup>1</sup> governmental

<sup>3</sup><sup>1</sup>governmental

もとの強勢型を保持していない場合は、間違った強勢型を付与するが、語根化しても基体はもとの強勢型を保持していると考えれば、新派生語に正しい強勢型が付与できる。他の型のものについても、語根化した基体がもとの強勢型を保持していると考えれば、正しい強勢型が付与できることを1, 2の例について下に示しておこう。

	c. <sup>3</sup> <sup>1</sup> perceivability
第2サイクル	<sup>1</sup> perceivability
PSR	<sup>1</sup> <sup>1</sup> perceivability
SSR	<sup>1</sup> <sup>1</sup> perceivability (空虚な適用)
ISR	<sup>1</sup> <sup>1</sup> <sup>1</sup> perceivability
DR	<sup>1</sup> <sup>1</sup> perceivability
CSR	<sup>2</sup> <sup>1</sup> perceivability
NSR	<sup>3</sup> <sup>1</sup> perceivability

<sup>3</sup><sup>1</sup>perceivability

	d.	<sup>3</sup> un <sup>3</sup> advis <sup>1</sup> ability
第2サイクル		<sup>2</sup> un <sup>1</sup> advisability
PSR		<sup>2</sup> un <sup>1</sup> advisability
SSR		<sup>2</sup> un <sup>1</sup> advisability (空虚な適用)
ISR		<sup>1</sup> un <sup>1</sup> advisability
DS		適用できない
CSR		<sup>2</sup> un <sup>2</sup> advis <sup>1</sup> ability
NSR		<sup>3</sup> un <sup>3</sup> advis <sup>1</sup> ability

---

<sup>3</sup>un<sup>3</sup>advis<sup>1</sup>ability

問題は、語根化しても、基体はもとの強勢型を保持しているという仮説の当否であろう。話者の辞書にたくわえられている基体にはその形成過程を示す [ ] や境界記号は存在していなくても、強勢型を含む音形は示されている筈である。話者によるその基体の多用は、形成過程が示されていないがために基体を語根化させることはあっても、強勢型はより固定化させるであろう。語根化した基体はもとの強勢を保持していると考えの方が、新派生語では基体のもとの強勢は失なわれると考えるよりずっと自然である。

#### 4 む す び

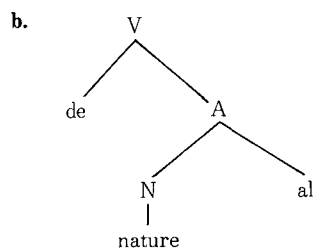
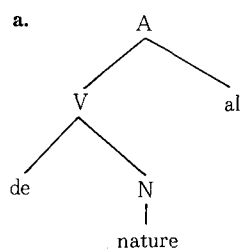
むすびにかえて、筆者の代案は、複合語+接辞をも含む、すべてのオーダーリング・パラドックスの語例に適用できること、そして、何故(iii)型のパラドックスの語例は英語にはないか、他の型のものについても、接辞の種類によっては、語例が非常に少ないか存在しないものもあるのは何故かという疑問に対しても、いわゆる阻止 (blocking) 現象<sup>11)</sup>が働いているのでなければ、基体が語根化しているものがないためである、という答えが用意できることを強調しておく。

#### 注

- 1) Kiparsky (1983a, p. 17) は(ii)型の例外は英語には見出されないとしているが、Aronoff (1976, p. 125fn.) はこの2語を(ii)型の例外としてあげている。-able という接尾辞にはクラスIに属するものとクラスIIに属するものの2種があり、circumscribe には circumscriptible と circumscribal, perceive には perceptible と perceivable の2種類の派生語が存在す

る。夫々、前者は *-able* の付加によって基体の形が変っているのに対して、後者は変っていない。このことによって前者の *-able* はクラス I、後者の *-able* はクラス II ということになる。Aronoff 自身は、*inconceivable*, *indescribable* の 2 語を (ii) 型の例外とする根拠は何も示していないが、多分、この両語では *-able* の付加が基体の形を変えていないので、この両語の *able* はクラス II と考えたためであろう。もしクラス II であるなら、*in-* は形容詞に付加されるクラス I 接頭辞であるから (大石, 1985, p. 432; 竝木, 1985, p. 20 参照), (ii) 型の例外となる。

- 2) Aronoff (1976, p. 54fn.) は *governmental* については、*government* には大石 (1988, p. 48) 流に翻案していえば、「動詞から直接導き出される「統合(すること)」という意味と、拡大された「政府」という意味と両方あるが、*-al* が付加されるのは拡大された意味のほうである」ことに着目し、拡大された意味の *government* には *X<sub>v</sub>ment* という意識がなくなり、それ故 *-al* の付加が可能になるという趣旨の説明を提出している。しかしこの説明は *developmental* には適用できないことを Aronoff 自身が認めている。
- 3) Guerssel (1984), Sproat (1985), 竝木 (1985), 丸田 (1986) にも説明が提出されている。しかし Guerssel, Sproat, 丸田の説明は語彙音韻論とは異なった枠組みによるものであり、また竝木の説明は、それらは例外であるとした上で、何故そういう例外が生ずるのかということについての説明である。ここで考察の対象にしているのは、語彙音韻論の枠組みで、(iv) はどういように考えれば、例外ではなくなるかという説明であるので、この 4 人の説明は考察の対象から外す。
- 4) *de-* は名詞に付加して動詞を作る接頭辞であり、*-al* は名詞に付加して形容詞を作る接尾辞である。*denatural* は次のように、どのように構造分析しても、投射の原理の条件に違反する (大石, 1988, p. 203 参照)。



- 5) *-ity* はクラス I 接尾辞として扱われて来ている。その根拠については Suzuki (1987, p. 80), 大石 (1985, pp. 451ff.) 参照。
- 6) Ohta は一切の接辞を含まない語根 (root) はクラス 0 として扱う。
- 7) Mohanan では複合は接辞付加の後で行なわれることになっている。したがってこれらの例はオーダーリング・パラドックスの例になる。ただし Kiparsky ではクラス II 接辞付加と複合は同時に行なわれる。したがって、Kiparsky ではクラス II 接辞をその外側にもつ複合語はオーダーリング・パラドックスを構成しない。しかしクラス I 接辞をその外側にもつ複合語は、Kiparsky でも、オーダーリング・パラドックスを構成する。
- 8) *-able* の付加が基体の第 1 強勢の位置の移動を引き起こして居らず、基体の形も変えていないもの。
- 9) Siegel の規則に現われる変項 Q, P は夫々次のように規定されている。

Q = ゼロ個以上の非強勢分節音の連鎖 (a sequence of zero or more unstressed segments)

P = ゼロ個以上の種類を問わない分節音の連鎖 (a sequence of zero or more segments of any sort)

またWは「弱結合」(weak cluster)のこと。

- 10) 語彙音韻論では境界記号が排除されているのは、語彙音韻論の仕組みでは、境界記号が不要であるので排除されているだけで(詳しくは桑原・高橋, 1985, pp. 19f. 参照), SPE方式と語彙音韻論とは、そのために強勢付与の結果に異同が生じるわけではない。
- 11) 阻止現象については, Aronoff (1976, pp. 43f.), Clark and Clark (1979, p. 798), 竝木 (1985, § 4.5), 大石 (1988, § 7.3) を参照。

### 参考文献

- Allen, M. (1978) *Morphological Investigation*, Ph. D. dissertation, the University of Connecticut.
- Aronoff, M. H. (1976) *Word Formation in Generative Grammar*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Clark, E. V. and E. H. Clark (1979) "When Nouns Surface as Verbs," *Lg.*, 55, pp. 767-811.
- Fabb, N. A. J. (1984) *Syntactic Affixation*, Ph. D. dissertation, MIT.
- Guerssel, M. (1983) "A Lexical Approach to Word Formation in English," *L. A.*, 12, pp. 183-243.
- Halle, M. (1973) "Prolegomena to a Theory of Word Formation," *L. I.*, 4, pp. 3-16.
- Hayes, B. (1980) *A Metrical Theory of Stress Rules*, Ph. D. dissertation, MIT.
- (1982) "Extrametricity and English Stress," *L. I.*, 13, pp. 227-76.
- Kiparsky, P. (1982a) "Lexical Morphology and Phonology," *Linguistics in the Morning Calm*, Seoul: Hansin, pp. 3-91.
- (1982b) "The Lexical Phonology of Vedic Accent," ms., MIT.
- (1983a) "Word Formation and the Lexicon," in F. A. Ingeman (ed.), *Proceedings of the 1982 Mid-American Linguistics Conference*, Lawrence: University of Kansas, pp. 3-29.
- (1983b) "Some Consequences of Lexical Phonology," ms., MIT.
- 桑原輝男・高橋幸雄 (1985) 「総論」『音韻論』(現代の英文法3), 東京: 研究社, pp. 1-144.
- Lehnert, M. (1971) *Reverse Dictionary of Present-day English*, Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie.
- Lieberman, M. and A. S. Prince (1977) "On Stress and Linguistic Rhythm," *L. I.*, 8, pp. 249-336.
- Lieber, R. (1980) *On the Organization of the Lexicon*, Ph. D. dissertation, MIT.
- 丸田忠雄 (1986) 「順序づけ仮説の逆説について」『英語学論考』第5号, pp. 33-43.
- Mohanan, K. P. (1982) *Lexical Phonology*, Ph. D. dissertation, MIT.
- 竝木崇康 (1985) 『語形成』(新英文法選書第2巻), 東京: 大修館書店.
- 大石 強 (1984) 「語構造の再分析について」『文経論叢』(弘前大学人文学部), 第19巻第3号, pp. 85-97.

- (1985) 「語形成」『音韻論』(現代の英文法 3), 東京: 研究社, pp. 389-495.
- (1988) 『形態論』(現代の英語学シリーズ 4), 東京: 開拓社.
- Ohta, S. (1987) "On Ordering Paradoxes in Morphology," *English Linguistics*, 4, pp. 38-54.
- Pesetsky, D. (1979) "Russian Morphology and Lexical Theory," ms., MIT.
- (1985) "Morphology and Logical Form," *L. I.*, 16, pp. 193-246.
- Pulleyblank, D. (1983) *Tone in Lexical Phonology*, Ph. D. dissertation, MIT.
- Selkirk, E. O. (1982) *The Syntax of Words*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Siegel, D. C. (1974) *Topics in English Morphology*, Ph. D. dissertation, MIT.
- Sproat, R. (1985) *On Deriving the Lexicon*, Ph. D. dissertation, MIT.
- Strauss, S. L. (1982) *Lexical Phonology of English and German*, Dordrecht: Foris.
- Suzuki, Y. (1987) "On the Paradox of *Un-X-a-bility*," *Linguistics and Philology*, 7, pp. 75-100.
- Williams, E. (1981) "On the Notion 'Lexically Related' and 'Head of a Word,'" *L. I.*, 12, pp. 245-74.